

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 1 日現在

機関番号：30106

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25770090

研究課題名(和文) 1930～40年代の朝鮮、台湾、満洲における日本語文学と“言説の磁場”の検討

研究課題名(英文) Analysis of Japanese Literature and "Magnetic Field of Discourse" in Korea, Taiwan, and Manchuria in the 1930s-1940s

研究代表者

宮崎 靖士 (MIYAZAKI, Yasushi)

北星学園大学・社会福祉学部・教授

研究者番号：10438351

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：1940年前後に、朝鮮では、日本語表現の送り手と受け手における、対象に関する理解や知識の落差をめぐる多様な議論と実践が存在したこと。及び台湾では、「台湾文化」をめぐる日本語での表象に関して、特にその表象がもつ均質性をめぐり種々の試みがなされたこと。そして「満洲」では、満系作家のテキストの日本語訳がもつ社会的地位が、「満洲国」の文芸管理体制とは同調せず、ただしその存在を尊重されるものとして確立、強化されたことをそれぞれ明らかにした。それらは、上記の地域で暮らす人々が、日本語に対する主導権を確保し、その使用を自らにとって生産的なものとしていった集合的实践という共通点をもつ。

研究成果の概要(英文)：This study explains situations around 1940 in three areas: Korea, Taiwan, and Manchuria. In Korea, various discussions and practices concerned gaps between senders and receivers of Japanese expressions, specifically their knowledge and understanding of relevant subjects. In Taiwan, varied attempts aimed at the representation of "Taiwanese culture" in the Japanese language, especially considering its homogeneity. In Manchuria, although the social status of Japanese translations of texts written by Manchu writers did not correspond with the literature controlled by "Manchukuo," such translations had been established as valuable. These situations have one thing in common: the fact that the people in these regions had taken initiatives to use the Japanese language and employed the language productively for themselves through their collective practices.

研究分野：日本文学

キーワード：日本語文学 言説 磁場 朝鮮 台湾 満洲 1930～40年代 表現論

1. 研究開始当初の背景

1990年代以降、近代日本の植民地政策とそれをめぐる諸問題は、日本の内外、及び学問領域の垣根を越えて研究者の強い関心を集めつつけている。その背景には、かつて帝国主義的な対外政策のもとで「大東亜共栄圏」の形成を理念としつつアジア太平洋戦争を行った日本の経験を負の記憶としてのみ封印するのではなく、それを明らかにすることから21世紀における世界秩序のもとで日本が選ぶべき進路の指針を、あくまで批判的に、かつ建設的に模索しようとする潮流が強く存在する。

そのような潮流と合致する文学研究に関わる検討成果として、1945年以前の植民地や外地における文学活動を「内地」の文学動向や現地での日本語使用との関連から概括的に論じた著作が発表されてきた。特に朝鮮に関しては、鄭百秀『コロニアリズムの超克』や、趙寛子『植民地朝鮮/帝国日本の文化連環』が注目され、台湾については、垂水千恵『台湾の日本語文学』や、フェイ・阮・クリーマン『大日本帝国のクレオール』が代表的なものである。そして「満洲」については、岡田英樹『文学にみる「満洲国」の位相』や尹東燦『「満洲」文学の研究』等の成果がある。そして更に、『日本植民地文学精選集』、『近代朝鮮文学日本語作品集』、『日本統治期台湾文学作品集』、復刻版『満州浪漫』等の出版により、基礎資料の整備も充実した。如上の背景をふまえ、件の研究成果を、日本文学研究の立場と方法から、より学術的に発展させるためにできることとは何か。それは、植民地政策下で行われた日本語による営みを、その分析において文学研究のスキルを十分活用しつつ、地域ごとの特殊性を尊重しながら総合的に把握し、そこで見出される特質や意義を現代的な課題にまで接続するための視座と方法論の確立だと考える。

このような問題意識に基づく本研究は、研究代表者が2009~11年度にかけて科学研究費補助金(若手研究B)の支給を受けて実施した検討課題(「近代日本語=言文一致テキストにおける「植民地体験」の表象をめぐる表現論的検討」)の発展として位置づけられるものである。上記の研究課題において研究代表者は、近代における日本語文学作品、日本語研究、日本民俗学の言説に注目し、その中でも、特に1920~40年代に展開された同化的な植民地政策に対して、葛藤的かつ批判的な反応を、その執筆過程において強いられたことが顕著に想定されるテキストを検討した。その結果、言葉の送り手と受け手が同一の立場や価値観を共有し得ないような状況におけるコミュニケーションの構造と、そこにおいて日本語使用を通じて自らの立場を確保し、隣接する他者との共存を図ろうとする営みの諸相を明らかにすることが出来た。

そのような検討を通じて、特に朝鮮におけ

る日本語使用をめぐる、植民地出身の日本語文学者のテキスト傾向と「内地」出身の日本語学者の論説が、各々の執筆モチーフや経緯を全く異にしつつも同一の問題系をめくり展開されている事態を発見した。そしてそのような問題系の存在は、他の植民地や外地においても想定されるものであり、それを地域ごとに明らかにし比較検討することで、抑圧に対する抵抗という構図のみに収束するのではない、日本語使用をめぐる歴史的な諸相を浮き彫りにできるという着想を得るに至ったのである。

2. 研究の目的

本研究では、上記の検討課題への従事から培った視点や方法を基礎として、まずは朝鮮に関する検討を精緻なものとし、他の地域における事態を検討する上での基準作りを試みる。その上で、対象を台湾と「満洲」へと拡大しつつ、各地域における事態を明らかにし、それらの比較対照と総合までを試みる。そのような検討の焦点をなす用語として、本研究では、日本語使用をめぐる「言説の磁場」というタームを用いる。

この「言説の磁場」とは、特定の時期と地域において、多くの作家や論者が、個別の創作意図や著作モチーフを超えて引き寄せられた、日本語使用をめぐる問題を指すこととする。それを明らかにするために本研究では、日本語文学テキストに表現論の観点からの分析を施すことで得られる表現傾向の集積を中軸として、更にその背景としての日本語論や日本語政策の動向をも考慮することから、植民地や外地において立場を異にする人間が共通して関与していた問題を見出していく。

そのような検討のプロセスを経る理由は、件の事態を、為政者による言語政策の側からではなく、政策が施行される場で生きた当事者の個の立場から発し、かつ同時代的に共有されたものとして捉えることを本研究が目指すからである。そして更に文学テキストを検討の中軸とする理由は、植民地政策の基本が、現地に暮らす人々の用いていた言葉とは別の言語を権威を伴う形で導入し展開する営みであり、植民地や外地における文学活動は、まさにそのような言葉を用いて、自らを取り巻く現実をより望ましい方向へ改善しようとする営みとなる可能性をもつからである。即ち、文学テキストを、個の立場からなされる植民地政策に対する最も先鋭的な批評行為たり得る営みとして捉え、それ故に検討の中軸とするのが本研究の立場となる。

また検討の時期に関しては、各地とも1930~40年代の動向を対象とする。そしてその中でも特に、40年前後に皇民化政策の一環として文化面に関する統制の強化が実施されたタイミングに焦点を据えた分析を行う。その理由は、この統制強化が朝鮮、台湾、「満洲」にわたり、ほぼ同時に展開されたものであ

り、かつそのような文化統制に対するリアクションにおいて、各地が抱えていた日本語使用をめぐる問題が端的な姿で浮上すると考えるからである。そのような共通の観察点を用意することで、三地域における事態を比較する共通の地盤を確保し、そこから三地域における事象の固有性を矮小化することなく、それらを包括的に把握できる新たな認識枠組を提示することまでを本研究では目論むのである。

3. 研究の方法

(1) 平成 25 年度に関して

朝鮮における事例を検討対象とする。ここでは、研究代表者における既発表の検討成果に基づきながら、それに補足を施しつつ、特に朝鮮と台湾における「言説の磁場」を構成する諸要素を精査する。その要素は第一に、日本語文学テキストの検討から見出される同時代における主導的な表現傾向とそれに対する批評的な試みである。そして第二に、そのような文学における日本語使用の背景をなす日本語論や日本語政策の言説傾向である。そしてそれらの要素を総合的に関連させるときに浮上する、それらが共有する問題を、特に朝鮮と台湾における「言説の磁場」として記述していく。

そこで本年度は、当時の朝鮮文壇における日本語使用に関する主導的な批評家であった崔載瑞に注目し、その論説傾向を分析する。そしてそこから見出される日本語使用をめぐるスタンスを、申請者が既に検討した金鍾漢や牧洋の日本語文学活動における傾向と対照する。更に、日本語論と日本語政策の言説については、その中に占める時枝誠記の立場に留意しつつ、1940 年以降の日本語使用の圧力の高まりや、42 年以降の「国語普及運動」の展開を実証的に確認していく。そこからは、日本語表現の送り手と受け手の双方にわたる対象の理解に関する同一性をめぐる問題が浮上すると考えられ、朝鮮に関する「言説の磁場」は、そのようなものとして見出されると予想される。

なお、以上の作業と並行して、本年度より、日本の旧植民地全般に関する歴史事情、及び言語政策に関する基礎資料の収集と検討も開始する。それと同時に、平成 26 年度以降の検討を円滑に展開するための日本語文学関係の資料収集もすすめる。

(2) 平成 26 年度に関して

台湾における事例を検討対象とする。ここでは、藤井省三『中国語圏文学史』、垂水千恵『台湾の日本語文学』、葉石濤『台湾文学史』、和泉司『日本統治期台湾と帝国の文壇』等の先行研究を基盤として、1940 年前後に台湾文壇で発表された日本語文学テキストを主に検討する。具体的には、40~41 年に相次いで創刊された『文芸台湾』『台湾文学』における主要な書き手たちのテキストに

注目し、そこに認められる表現傾向を整理・確認することからはじめる。具体的には「台湾皇民文学」の代表作家とされる王昶雄、周金波、陳火泉や、「郷土文学派」とされることもある張文環、呂赫若、龍瑛宗、楊逵、更には「内地」出身の文学者として当時の台湾文壇を主導した西川満の言説等を対象とする。そして一方では、右の如き文学テキストの傾向を生み出し、かつ支えた背景としての、日中戦争開始以降の台湾総督府による皇民化政策のうち、特に日本語政策に関わるものとして、新聞の中国語欄の廃止や国語常用家庭制度の実施(37 年)、台湾文芸家協会(39 年設立)の活動等の概要を確認しつつ、藤井省三氏が指摘した「台湾皇民文学」の興隆と文芸市場の成熟を基礎とした「公衆と公共圏」の誕生という問題を重視し、それと文学テキストの表現傾向との有機的関連を明らかにしていく。すると、右の「公衆と公共圏」の形成を主導する表現傾向と、そのような事態への歯止めを試み、件の潮流に対する再考を促すような批評的な試みとの共存が見出されると予想される。しかもそのような共存は、上にあげた多くの作家の表現傾向に内在しているものであることが推測される。そのような検討と並行して、25 年度より開始している基礎的な資料収集と分析も継続する。

(3) 平成 27 年度に関して

「満洲」における事例を検討対象とする。ここでは、岡田英樹『文学にみる「満洲国」の位相』、尹東燦『「満洲」文学の研究』、川村湊『異郷の昭和文学』、『文学から見る「満洲」』等の先行研究を基盤として、1940 年前後の新京における「満洲」文壇で発表された日本語文学テキストを主に検討する。なお、「満洲」は形式上の独立国であり、日本語が単一の公用語として制度的に強制されることはなかった。その点から、朝鮮、台湾の場合とは異なるアプローチが、「満洲」に関しては必要となる。そこで注目するのが、「満洲」文壇においては、「内地」出身の作家(= 日系)と現地出身の作家(= 満系)が各々の使用言語による発表媒体を確保しつつ、相対的な棲み分けを行いながら、特に翻訳を通じて相互交流を試みていたとされる事態である。

そこで「満洲」に関しては、第一に満系作家のテキストの日本語訳と、それをめぐる事態に注目する。その中でも特に、『満人作家小説集 原野』(1939 年)『同第二輯 蒲公英』(40 年)、古丁『平沙』(40 年)等の代表的な日本語訳テキストと、その翻訳を手掛けた大内隆雄の動向を検討する。そしてその翻訳行為の特質を、題材の選択や表現傾向の特色をはじめとし、更には「満洲」文壇における日系文学者たちの「満洲文学論争」、および満系作家たちの「郷土文学論争」との関わりをも考慮しつつ検討する。

更に一方では、右の如き日本語文学テキス

トをめぐる動向と関わる周辺状況として、日中戦争開始以降の文化面における統制強化の代表例である「芸文指導要綱」の実施（41年）と、それをめぐる事態に注目する。重要なのは、「満洲」の場合、そのような「内地」からの統制強化に対して日系作家の側が、主に文芸への国策の干渉として反発を示した点である。以上から、日本語使用の意義や価値が、日系作家と満系作家の翻訳を通じた相互交流を通じて生成され更新されていく次第が明らかになると推測される。

そしてそのような成果をふまえて、朝鮮、台湾における事例の補足検討も行いながら、本研究の総合を行う。そこからは、各地域の事情に即した「言説の磁場」の諸相と、様々な日本語への向き合い方が見出される予定である。そのような日本語使用の多様性を包括的に把握できる認識枠組を提示することで、本研究のまとめを果したい。

4. 研究成果

(1) 朝鮮に関して

1940年前後の朝鮮文壇における、特に日本語使用をめぐる言説傾向を明らかにすべく、主に次の2点からの検討を行い、以下の成果を得た。第1には、この時期における日本語政策の特質を検討した。その結果、文化面、その中でも特に文学における日本語使用については、学校教育や職場、家庭における日本語使用と比較して、総督府や総力連盟からの介入・指導の度合いが低く、日本語使用の如何について文学者個々人の裁量に委ねられる部分が相対的に大きいことが確認できた。そしてそれ故に、朝鮮文壇における日本語使用については、文学者個々におけるそれへの主体的な関与や意味付けが多様になされたという観点を得られた。

続けてこの時期における朝鮮文壇の主導的な批評家であった崔載瑞の言説を検討した。これに関しては、三原芳秋氏の指摘をふまえ、異質なもの同士の交渉を双方に変容をもたらす機会として把握する観点を重視した分析を行った。そこで本研究が新たに注目したのは、崔載瑞における日本語認識の展開である。その特徴は、日本語をあくまで何かの目的にむけた手段とする点に求められ、それは編集主幹の立場から雑誌『国民文学』を国語雑誌へと改変した際の言動からも明確に認められるものであった。そのような検討から、崔載瑞における日本語使用へのスタンスは、それによって「内地人」にむけた語りかけを行い、朝鮮文壇の現状に関する解説者の役割を担いながら、この問題に関する理解や知識の落差を活用しつつ「内地」と「朝鮮」の関係性を「朝鮮」の側の利益を保持する形で組み替えつつ維持しようとする試みの連続として理解できた。

以上の検討成果を、既に公表している金鍾漢、牧洋、時枝誠記の言説傾向に関する理解と総合すると、日本語表現の送り手と受け手

の双方における対象の理解や知識に関する落差をめぐる多様な試みの存在が明らかとなり、朝鮮における「言説の磁場」を、そのような営みの集積として見出すことが可能となった。

なお、当初の計画には明示していなかった、李光洙、金龍濟、兪鎮午が1940年前後に発表した日本語テキスト群の検討もを行い、それぞれがどのような点に理解の落差を見出し、自身の文学活動を展開したかという点の分析を加味することで、「言説の磁場」のありようを、より立体的に把握することが可能となった。李光洙に関しては、1939年後半から40年前半にかけての時期に日本語使用を「日本人」になるための必須の手段として強調するように転じる次第を、時代状況との関わりから分析した。また金龍濟については、39年前半期から、新時代における朝鮮文学の旗手としての日本語使用に積極的に関与するというスタンスを浮き彫りにし、兪鎮午においては、朝鮮文学を「内地文壇」と共通の基準で価値評価されるべきものとし、それにむけた日本語創作をめぐる模索と提言を行う次第を検証した。

(2) 台湾に関して

1940年前後の台湾文壇における日本語使用をめぐる言説傾向を明らかにすべく、主に次の2点からの検討を行い、以下の成果を得た。第1には、この時期に発表された日本語文学テキストの特質を検討した。その中でも特に注目されたのが、張文環と龍瑛宗の表現傾向である。1939～43年の間におけるその変遷を追跡すると、張文環の場合は、まず物語行為の水準で物語内容の統一性を阻む傾向から始まり、続けて、既がない/姿を消しつつある存在や事柄に物語内容の統一性を集約させる傾向に移り、その上で、台湾に関する既成のイメージや物語のパターンからの逸脱を顕示するに至るという次第が認められた。また龍瑛宗の場合は、視点人物が、偶然に出会った出来事や日常の1コマに外国文学を中心とするイメージを付与することでそれを異化する傾向から始まり、続けて、台湾の制度や歴史・社会性にとらわれ、解決・脱出口が見出し難い主人公を象徴的に描く作風へと移行し、その上で、弱い者や小さな存在、及びその周囲の人間を含めた個々人の人生模様をめぐる美談を描くに至ることがわかった。

そして第2には、日中戦争開始以降に実施された日本語政策と、その中で日本語研究者の言説を検討した。その中でも特に注目されたのが、安藤正次の動向である。その特質は、日本語使用を同化の手段としない点に求められ、それは総督府による日本語政策の立場と明確に異質なものであった。

以上の検討成果をまとめると、台湾やそこに暮らす人々をめぐる表象を行う上で、それを台湾人の全体や本質を代表するものとし

て理解されることを回避し、そこから認識のレベルで台湾人の固有性が失われないようにする配慮を伴うことで、必ずしも同化と結びつかない日本語使用の認識や実践が、個別の作家や論者の営みに限定されないものとして認められた。そしてそれは、40年前後に展開された「台湾文化」をめぐる議論や実践の中で、その表象がもつ均質性を回避しようとした試みの諸相としても理解できる。そのような事態を、台湾における「言説の磁場」のありようとして理解できた。

なお、当初の計画では想定していなかった検討成果として、更に次の2点があげられる。第1には、上記の傾向が、日本語使用をめぐる抑圧と抵抗という構図からは把握できないものであり、かつ同時代における楊逵や呂赫若等の台湾人作家や、西川満や濱田隼雄等の在内地人作家の表現傾向にも認め得るものであることがわかった。即ち件の傾向は、上記の3名の言説に限定されるものではなく、当時の代表的な日本語作家の間に広く認められ得ることが推測できた。そして第2には、上記の傾向が、同時代に展開された台湾民俗学の言説傾向とも呼応し得るものであり、更にまた、従来の台湾文学史における「皇民文学」の把握にも新しい視点を提供する点である。特にこの点については、藤井省三氏による「言語的同化を通じて本島人化されたという台湾人の植民地経験」が、しかし「共同意識の形成を助け、台湾大のナショナリズムが萌芽した」という指摘と対照するとき、そのような事態の進行と同時並行的に展開された、ただし必ずしも同化に収束しない日本語使用をめぐる集団的実践の様相を示すという意義をもつ。

(3) 満洲に関して

1940年前後の新京を中心とする「満洲」の文学状況と、そこにおける日本語使用をめぐる言説傾向を明らかにすべく、創作集『原野』(39年9月)以降に発表された、大内隆雄等の訳者による満系作家の日本語訳テキストと、それをめぐる動向を、単行本、新聞、雑誌掲載のものにわたり包括的に検討し、主に以下の4点を明らかにした。なお、そのような日本語訳テキストについては、満系作家を原作者とし、日本人の文学関係者が翻訳とその評価を行った点において、双方の関与が織り込まれている検討対象として本研究では把握している。

創作集『原野』に、この書物に対する典型的な評価である「暗さ」という傾向と合致しないテキストや、合致しない側面をも多分にもつテキストが多く含まれること。

『原野』の翌年に刊行された創作集『蒲公英』(40年7月)では、『原野』に対してなされた「暗さ」という評価と合致するテキストが多く収録されていること。

この「暗さ」は、「芸文指導要綱」(41年3月)に示されるような、「満洲」において推

奨される文芸の性格とは必ずしも合致しないものであること。ただし、満系を含む諸民族の文学作品の日本語訳は、「満洲」政府から推奨される行為であり、件の「暗さ」は(それのみでは)弾圧の対象とはならなかったと判断できること。

『蒲公英』以降の日本語訳テキストでは、件の「暗さ」に収束しない、多様な作品傾向が明確に前景化すること。そしてそれは、文芸の多様性を指向する「芸文指導要綱」とも合致していること。

以上を総合すると、件の「暗さ」という評価が、文芸創作に関する「満洲国」の管理体制が進展する中で、その潮流と同調しそれを加速させるものではなく、ただしその存在を尊重されるという独自の社会的地位を日本語訳テキストに提供したことが浮き彫りとなる。更に『蒲公英』以降は、「暗さ」以外の側面が、満系作家の日本語訳テキストに対する評価のバリエーションとして付加され、件の地位が「暗さ」を基底にもちつつも、その上層に多様な側面を抱えるものとして、より確固なものとなっていく次第が推測される。そのような事態をもたらししたものを、「満洲」における「言説の磁場」として理解できた。なお、件の「暗さ」は、満系作家における1930年代はじめからの表現傾向であり、そこにおける傾向が、更なる多様性を帯びつつ、日本語訳という形で継続・展開されたという意義をもつものでもあった。

(4) まとめと今後の展望

以上、朝鮮、台湾、「満洲」における日本語文学をめくり、1940年前後という時期に生じていた事態を明らかにしてきた。そこに共通するのは、いずれの地域での出来事も、言語使用という局面での抑圧に対する抵抗や主体性の喪失、もしくは沈黙といった枠組みで理解できるものではないこと。更には、その動向に植民地・外地出身の人間のみならず、「内地」出身者も関与していることである。そのような事態は、特に文学という局面で日本語使用がなされていく中で、日本政府、及び総督府、更には「満洲国」政府のコントロールが及ばない、あるいはそこから一人歩きをした状況の発生だといえる。そしてそれらは、個々の地域で、日本語が使用される以前からの言語使用における歴史や社会状況、そして文学を含む文化全般の展開に関与する人間たちの関心傾向等との関わりにおいて様々な現れ方をしつつ、日本語という言語の使用を、それぞれの土地で暮らす人々(植民地・外地出身者と「内地」出身者の双方にわたって)が、日本語に対する主導権を確保し、そしてその使用を自らにとって生産的な(あるいは、少なくとも生産的な一面をもつ)ものとしていった集合的実践という共通点をもつことが明らかとなった。

以上のように本研究は、「内地」の外で行われた日本語・日本文学をめぐる歴史的な事

態を、複数の地域にわたり比較検討するものであった。それと同時に、そのような検討において文学テキストの表現分析を中軸に据え、そこから言語論と言語政策の言説との関連までを視野に入れるという、学際的かつ総合的なアプローチを試みるものでもあった。そのような研究代表者の専門性に根ざした地域横断的かつ学際的なアプローチは、文学や日本語使用に限定されない、今後の植民地や外地をめぐる諸研究に対しても方法的な先駆性を担うものとなり得るだろう。

如上の検討を通じて、朝鮮、台湾、「満洲」におけるそれぞれ独自の日本語使用へのスタンスが浮上した。そのような成果は、1930～40年代の「日本文学」を、多くの日本語使用地域にわたる、固有の事情や課題を抱えた「日本語文学」の集合として把握し直すための基盤を提示するという意義をももつと考える。そのような基盤は、「内地」における「近代の超克」等の文学史的テーマを、東アジアの日本語表現をめぐる同時代性という観点から捉え直すことを可能にするとともに、この時期の「日本文学」を日本語使用に対する問題意識と表現という観点から、「内地」に限定されないスケールで捉える視座をも開拓するだろう。そしてそのように、東アジアにおける日本語使用という検討の視野を日本文学研究に導入することは、現代のグローバル化した国際状況における「日本語」や「日本文学」の存在意義の検討にも直結するものであり、そのような現代的意義を担う課題を、日本文学研究の領域として確立することまでを、今後果たしていきたい。

引用文献（研究成果に関わるもののみ）

三原芳秋、Metoikos たちの帝国、社会科学（同志社大学）40-4号、2011、pp.1-42

藤井省三、大東亜戦争期の台湾における読書市場の成熟と文壇の成立、台湾文学この百年、東方書店、1998、pp.25-75

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 1 件)

宮崎靖土、龍瑛宗の日本語文学作品における表象傾向と、その変化をめぐって 一九三九～四三年を対象として、日本近代文学会北海道支部会報、査読有、19号、2016、頁未定（印刷中）

〔その他〕

ホームページ等

<http://www2.hokusei.ac.jp/hguhp/KgApp?kyouinId=yyyygggyym>

6. 研究組織

(1)研究代表者

宮崎 靖土 (MIYAZAKI, Yasushi)

北星学園大学・社会福祉学部・教授

研究者番号：10438351

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：